ラオスにおける12人姉妹
男山・女山として語り継がれる物語

橋本 彩

はじめに

ラオスにおいては、映画産業が過去においても現在においても隣国タイやカンボジアと比べると未発達なためか、12人姉妹の話は隣国と同様によく知られた物語であるものの、映像作品として制作されたものは存在しない。12人姉妹に限らず、民話は主に口承伝承として人々の間で語り継がれてきた。民話が絵本などの紙媒体もしくは映像メディアを介さずに、主に口承伝承で受け継がれてきた背景には、多民族国家であるラオスでは各民族の家族間言語が異なることも重要な要素であるが、その一方でラオス国内の識字率やテレビの普及率も深く関係しているように思われる。公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が2008年に発表したデータによれば、ラオスの1970年の15歳以上の識字率は39.4%と報告されている。識字率の推移を表にした図１ならびに2015年のラオス統計局による「性別・年齢による識字率」の図２を参照すると、近年の若年層の識字率は高い割合を示しているものの、歴史的にみると、文字媒体を介した物語の伝承は有効な手段ではなかったと言える。ラオス語の出版物も少なく、本を読む習慣も定着しているといい難いラオスでは、2016年よりヴィエンチャンにあるラオス国立大学にてブックフェスティバル（ラオス語では「脳のごちそう」フェスティバル）が開催され、読書を推奨する動きも出ている（図３）。

また、世界銀行が2009年に発表したラオスに関するデータに基づけば、2000年と2007年ともに、テレビセットを所有する家族は全体の30%である［World Bank 2009: 234］。そのため、映像を受信する環境が国内全体でみれば乏しく、映像が民話の伝承に役立つ環境でもなかったと言える。近年は都心部から離れた地域においてもパラボナアンテナを設置してテレビ番組を視聴する家族も増えているようであるが、都心部・農村地域にかかわらず視聴者が楽しんでいるのは、多くの場合、ラオス国内の放送ではなく隣国タイのテレ

図１　Adult literacy rate (% ages 15 and older)

1970年	1995年	2000年	2005年	2015年
39.4	60.3	69.6	72.7	79.9

出典：1970年はACCU（http://www.accu.or.jp/litdbase/stats/overview/ov03.htm、2017年12月4日閲覧）。1995年以降はUNDPのHuman Development Data（1900-2015), Education/Adult literacy rate（http://www.hdr.undp.org/en/data、2017年12月4日閲覧）。2015年ラオス統計局『Results of Population and Housing Census 2015』（p.62）によると識字率は84.7%となっている。

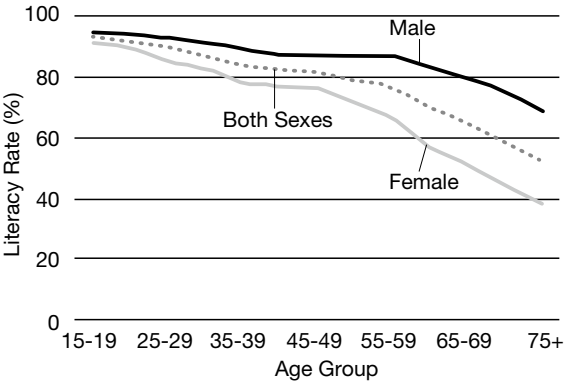


図２ 性別・年齢による識字率

グラフ出典：Lao Statistics Bureau, Ministry of Planning and Investment. 2015. *Results of Population and Housing Census* 2015. p.63

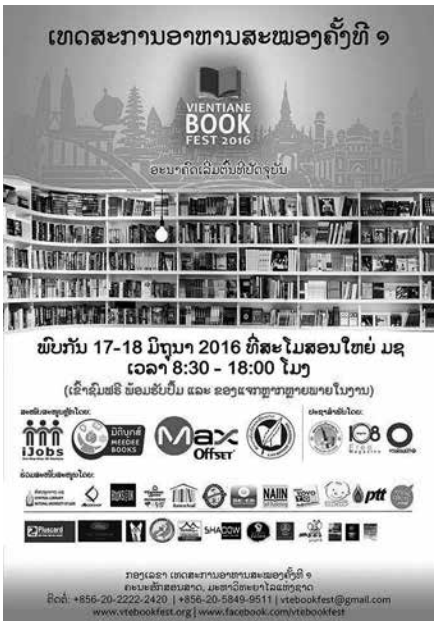


図３　2016年ブックフェスティバル

ビ番組であることが一般的なようだ。

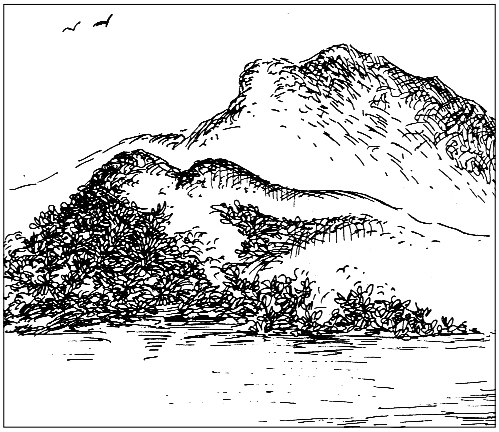
こうした環境の中、12人姉妹の物語は「プータオ・プーナーン」(ラオス語でプーは山を意味し、タオは男性の、ナーンは女性の敬称を示す)すなわち「男山・女山」という名のもと、北部ルアンパバーン地域の民話として実在する場所と関連させながら人々の間で伝承されてきた。

1. 北部ルアンパバーン地域の民話『男山、女山』

ルアンパバーンは、14世紀半ばにファーグム王によって建国されたラオ族最初の統一王朝ラーンサーン王国の古都である。1995年には街全体がユネスコの世界遺産に登録された。そのルアンパバーンの中心地はメコン川とその支流であるカーン川に囲まれており、1975年まで王が暮らしていた王宮が街の中心に位置している。12人姉妹にもっとも関連の深いスポットであり、ルアンパバーン出身者であれば殆どの人が知っている男山(プータオ)と女山(プーナーン)は、まさにこの王宮の真裏を流れるメコン川を挟んだ対面に位置する。

おもしろいもので、人々の認識の中の男山と女山の位置は微妙にずれている。特に若者たちの間で理解されている男山と女山の位置は、絵本の挿絵から推察する山とは異なっている。前述の通り、ラオスには12人姉妹にまつわる映像作品がないため、口承で物語が伝えられる過程で、人々は自分のイメージに近い実在の山を物語に出てくる山になぞらえて記憶していき、その結果、位置的に大きな齟齬はないものの、微妙なズレを生み出していったものと思われる。

なぜそれが「ズレ」なのかを知る手掛かりは、12人姉妹に関する本に描かれた挿絵や写真、そして唯一存在する『プータオ・プーナーン』の絵本にある。管見の限り、対象となる男山と女山の絵が描かれているのは、以下に示す『Treasures of Lao Literature』(2000年)の中の挿絵と絵本『プータオ・ プーナーン』(2010年)の中の最終ページに書かれた絵のみである。山の形状の多少の誤差はあったとしても、両者は共通して重なり合う山を男山、女山としていることが分かる。そして、分かりにくいながらも、決定的な写真によって証



『Treasures of Lao Literature』p.32

絵本『プータオ・プーナーン』p.28

『ルアンパバーンの伝説・年代記』男山(p.13)

『ルアンパバーンの伝説・年代記』女山(p.16)

図4　実際の男山（プッタセーン）と女山（カンヒー）
写真：難波美芸氏提供

図5　若者が認識している男山（プッタセーン）と女山（カンヒー）
写真：難波美芸氏提供

明してくれているのが『ルアンパバーンの伝説・年代記』に掲載されている男山と女山である［国立社会科学研究所, 歴史研究所 2013: 13, 16］。よって、これらを元に実在する山を見れば、図4の重なり合う山が男山（山となった男：プッタセーン）であり、女山（山となった女：カンヒー）であることが分かる。

一方、ルアンパバーンで聞き取りを行うと、特に若い人々は、別の山を指して「あれが男山であれが女山だ」と紹介してくれるケースが目立った。その山の位置関係は図5のようになる。多くの場合、男山にはさして関心が払われないものの、女山に関しては図5のように「女性の胸の膨らみがこの位置で、頭がこの位置だからこれが女山だ」と、重なり合う山が女山である根拠を説明してくれる。確かに言われてみれば、まさに女性が仰向けに眠っている形そのものに見えるが、結びつきの強い二人が重なり合うように亡くなり、その後山となったという物語の展開からすれば、若者が教えてくれた男山・女山では少々位置が離れており、二人の間柄に睦まじさは感じられない。しかしながら、物語との整合性よりも、生々しく女性の身体的特徴を感じさせるその山の存在こそが、「男山、女山」の伝承を語らしめ、人々に継承されてきた理由にも思われる。

物語の整合性からすれば、もう一つおもしろい点がある。物語の結末として、先に亡くなったのは女性であるカンヒーで、その後、その妻の亡骸を見て嘆き悲しみ、足元に覆いかぶさるように亡くなるのが男性のプッタセーンである。そのため、物語の筋を受ければ、男山と女山の位置関係は女山が男山よりも前に出ていることになる（図6を参照）。しかしながら、実際に語られる山の位置関係は逆になっている。文字化された12人姉妹の物語の中には、「プッタセーンはカンヒーの足元に覆いかぶさるように息絶え、二人の亡骸はそのまま山となった」と書かれているものもあるが、図7の高校1年生用『文学』の教科書に掲載されている「プータオ・プーナーン」[1]および前述の絵本では、「プッタセーンが亡くなった時、プッタセーンの頭はカンヒーの足に覆いかぶさっていた。天界にいるイン

1）この話は1960年の中学校教科書（読解）から抜粋したとの注釈有り（p.28）。

図6　カンヒーの足元に覆いかぶさるプッタセーン
絵本『プータオ・プーナーン』p.27

図7　高校1年『文学』教科書

ドラ神はこれを見て、将来、女性が男性をあまりにも押さえ込むのはよくないと考え、下界に降り、プッタセーンの遺体の位置をカンヒーの位置と逆にした。」という文章が加えられている。この最後に追加された文章の中に、ラオス人の信仰心ならびにラオスにおける男女間の関係性を垣間見ることができる。

2．12人姉妹と関係づけられている男山、女山以外の場所

2.1. パー・タッ・ケー（切り立った崖）

プッタセーンが女夜叉の国へ行く前に隠者と出会った場所。

現在は植物園（2016年11月オープン Pha Tad Keのwebsiteより）

写真中央の山がパー・タッ・ケーと呼ばれている場所
以降、出典が示されていない写真は筆者撮影（2017年5月）

パー・タッ・ケーの山腹

隠者が手紙を書き換える場面（絵本p.16）

ハート・マークナーオ

挿絵『Lao Legends』
（挿絵ASMUSSEN, Fleur Brofos.p.49）

ワット・ノーン・サケオ

2.2. ハート・マークナーオ（ライムの中州）

プッタセーンがカンヒーを振り切って逃げる際に投げた魔法のライムの種が育った場所。

地元民によれば、かつては中洲が出ていたが、現在は水位が年中高いため中洲が出ることはないと言う。しかしながら、ハート・マークナーオと言えば具体的に「ここ」と認識しており、メコン川から川岸を見た時のパバートタイ寺を目印としている。『Lao Legends』の挿絵にレモンが描かれているのは、マークナーオがレモンの意味を持つからであるが、ラオスでマークナーオはライムを指す。

2.3. スワン・テーン（天の庭）もしくはスワン・ウティニャーン・ナーン・カンヒー（カンヒーの庭）

現在のルアンパバーン地域の軍事キャンプとの記述が前述の教科書には書かれているが、この場所を明確に認識している地元民はおらず、2017年5月にルアンパバーンの情報文化・観光局で聞いてみたものの、場所は分からないとのことだった。教科書には「かつては様々な果物が育ち多種多様な美しい花が咲く庭園だったと言われている」との記述があり、カンヒーがプッタセーンに様々な魔法の実を紹介した庭とも考えられている。地元の女性の一人は、ワット・ノーン・サケーオ（輝く池のある寺）が12人姉妹の物語に関連する場所だと教えてくれたことから、物語の中の庭のイメージとこの場所のイメージが重なって、一部の人々に語り継がれているのかもしれない。

2.4. 関係箇所の全体像

男山、女山とこれら３箇所を地図におとしてみると、物語の筋に沿った配置になっていることがわかる。

関係箇所の全体像
google 3D mapをもとに筆者加工

３．12人姉妹との関連
――ルアンパバーンの新年祭りに登場する女夜叉

ラオスの新年は毎年４月13日～15日とされ、各地の寺院では人々が仏像に水をかけ、その年の幸運を祈り、新年を迎える。ラオスの中でも古都ルアンパバーンの新年祭りは一番盛大に祝われ、１週間ほど祭りが続く。祭りの中日には、その年の美人コンテストで選ばれた女性たちが主役となるナーン・サン・カーンと呼ばれるパレードが街の中心で２日に亘って行われるのだが、そのパレードに毎年、女夜叉（ナーン・ニャック）の扮装をした女性が二人参加している（図８）。新年祭りを統括している情報文化・観光局の担当者によれば、彼女たちの参加は個人の意思によるもので、局が彼女たちに参列の依頼をしているわけではないと言う。それでも毎年同じ女夜叉の格好で参加する彼女たちは、地元民にとっても、新年祭りに参加するために観光でルアンパバーンを訪れるラオス人たちの間でも有名な存在であるらしく、2014年に出版された『ルアンパバーンの鮮やかな文化』の中の新年祭りの写真を集めたページには彼女たちの写真が掲載されている［2014:16］。その女夜叉の扮装を見てみると、隣国タイの12人姉妹のテレビアニメに登場する女夜叉の影響を受けているように見える。ラオスの絵本で描かれる図９や図10の女夜叉がラオス人の女夜叉のイメージだとすれば、図11に登場するタイの女夜叉の方が彼女たちの扮装により近い。

図８ ルアンパバーンの新年祭りに登場する女夜叉に扮した女性２人

図９ 絵本『プータオ・プーナーン』の女夜叉（p.3）

図10 絵本『タオ・チェッハイ』の女夜叉（p.19）

図11 タイのアニメの中の女夜叉
website: การ์ตูน นางสิบสอง - พระรถ เมรี ตอนที่16
（タイのテレビアニメ「12人姉妹―プラロット・メーリー」第16話）

４．人形劇というメディア

ルアンパバーンには「イーポック」と呼ばれる人形劇がある。この人形劇は、約180年前にルアンパバーンに住むある男性によって創られたと言われており、その男性の娘の名がポックであったため、ポックの父さんの人形劇と呼ばれるようになり、次第に人形劇そのものがイーポックと呼ばれるようになったと言う［Ouvrard 2016: 21］。1975年までイーポックはルアンパバーン王の庇護のもと継承されてきたが、国家体制が変わると継承するのが難しくなり、1990年代初頭に現ラオス政府が伝統の復興政策を立ち上げるまで、ルアンパバーンの人形劇はだいぶ衰退してしまった。しかしながら、新たな世代を取り込んで活動を始めたイーポック劇団は、2008年よりラオスに伝わる有名な叙事詩や民話などを題材とした作品の上演を始めている。2015年にはヴィエンチャンを拠点に活動するオブジェクトシアターのカオニャオ劇団と共同で、ルアンパバーンの新年祭りに深く関連する民話「カビンラポムと７人の娘」を題材に舞台を行った（図12）。その後も2017年に同じくラオスの民話「シートン・マノラー」を題材とした舞台を行っている（図13）。

最初に述べたように、ラオス国内において文学や民話を扱った映像作品はほとんど存在していないものの、人形劇や舞台作品としては、ラオスに古くから伝

図12

図13

わる伝説や民話、叙事詩などが演じられ、文字や言葉だけではない、イメージを共有するメディアとして重要な役割を担っていると言える。現在のイーポック劇団のディレクターを努めるチャンペーン・シンペット(Chanpheng Singphet)さんに「ルアンパバーンに関連の深い男山、女山の作品は作らないのですか？」と尋ねてみたところ、「作りたいけれども、少なくとも12体は人形を作らなければならないし、登場人物が多いから労力的にも予算的にも大変なのよ」とおっしゃっていた。近い将来、もしかしたらラオスで初の人形劇「12人姉妹」が演じられるかもしれない。

5. ラオス全国に普及している物語「12人姉妹」

ここまでルアンパバーンと12人姉妹の物語の結びつきを見てきたが、そもそもこの物語はルアンパバーン地域でしか語り継がれてきていない物語なのかというと、そうではないことが12人姉妹の物語が書かれた貝葉文書(バイラーンとも呼ばれる：貝葉は椰子の葉)の存在によって確認することができる。ラオスの伝統的文学を理解する手がかりとして重要な貝葉文書は、多くの場合、寺に保管されており、フランス植民地時代からフランス人やラオス人による調査が行われてきた。第二次インドシナ戦争や1975年の王政から社会主義政権への転換期には貝葉文書の調査や保存活動は停滞したが、1980年代中頃より文学作品の重要性が見直され、再び全国に散在する貝葉文書の調査･保存を目的としたプロジェクトがトヨタ財団(1988－1994)やドイツ外務省(1992－2004)の援助によって開始された。そして、2007年に再びドイツの援助によりラオス貝葉文書デジタル図書館プロジェクトが始まり、これまでの成果を土台に、貝葉文書を所有している800以上の寺院から約86,000テキストがデータとして保存された。そのうち約12,000の貝葉文書はマイクロフィルム化され、2009年よりインターネットで自由に検索できるよう、ラオス貝葉文書デジタル図書館(Digital Library of Lao Manuscripts http://www.laomanuscripts.net/en/index)にて公開されている。

このデジタル図書館を利用してキーワード検索すると、「男山、女山(プータオ、プーナーン)」では1件も該当がなかったものの、「12人姉妹(ナーン・シップソーン)」では31件の貝葉文書が該当し、その保管地域が図14のように表示される。詳しい地域の内訳は以下の通りである。

- ヴィエンチャン特別市　9件
- ルアンパバーン県、サワンナケート県　各7件
- チャムパーサック県、カムワン県、ボケーオ県　各2件
- サイニャブリー県、ルアンナムター県　各1件

各該当データには主題と副題のタイトル表記もあるが、12人姉妹で該当したデータ内の主題と副題は以下の通りであった。

- 主題：プッタセーン、副題：12人姉妹　25件
- 主題：12人姉妹、副題：プッタセーン　6件

すなわち、文学の教科書内や絵本のタイトルとして使われる「男山、女山」は、貝葉文書が書き記された時代には使われていなかった可能性も考えられる。31件中、作成された年代が判明している貝葉文書で最も古いものはサワンナケート県の1879年、次いでルアンパバーン県の1890年、サイニャブリー県の1897年と続く。1879年から1889年にかけてインドシナ地域を調査したフランス人オーギュスト・パヴィもラオスに12人姉妹の物語が存在することを記録していることからしても、物語自体は古くからラオスに継承されていたものと考えることができる。しかし、「男山、女山」というルアンパバーン地域の民話として12人姉妹

地図14 「12人姉妹」をラオス貝葉文書デジタル図書館で検索した結果

の話が全国的に定着したのは、推測の域は出ないものの、教科書などを通じた学校教育を通して後年育まれていったものと考えられる。

6. 南部版「男山、女山」——タオ・バーチアンとナーン・マローンの物語

「男山、女山」の物語と言えば、必ずルアンパバーン地域の民話を指すのかといえば、そうではない。ラオス南部チャムパーサック県チャムパーサック郡の都市パクセー近郊出身の人に「男山、女山の物語を知っている？」と尋ねると、12人姉妹とは全く別の悲恋物語「タオ・バーチアンとナーン・マローン」の話をされることがある。それは、パクセーにも図15のようにメコン川を挟んで男山、女山とされる山があり、その山と共に「タオ・バーチアンとナーン・マローン」の伝承が継承されているからである。

物語の内容は12人姉妹と同じく最後に男女が死んでしまう悲恋物語だが、12人姉妹は親孝行の話である一方、南部の男山女山は親不孝の物語となっている。物語の詳細は資料２に譲るが、要点をまとめると、主人公であるナーン・マローンが親の勧める結婚相手タオ・バーチアンとは別の男性タオ・パーサックと恋仲になり、親を捨てて駆け落ちしたため、それに怒った父親が二人に死の呪いをかけ、二人は別々に死んでしまう。そして、ナーン・マローンと結婚する予定だったタオ・バーチアンもナーン・マローンの死を嘆き悲しみ死んでしまうという物語である。

物語の登場人物の関係図は以下の図16の通りである。実際には、この物語においてナーン・マローンもタオ・バーチアンも山になったという話にはなっていないのだが、話の中で語られる地名が南部に実在する場所であることに加え、「山になった」という現象が物語の中にいくつか埋め込まれているため、いつしかそれがタオ・バーチアン＝男山、ナーン・マローン＝女山と

図15 パクセーの男山女山
3Dmap写真：岩月祐二氏提供

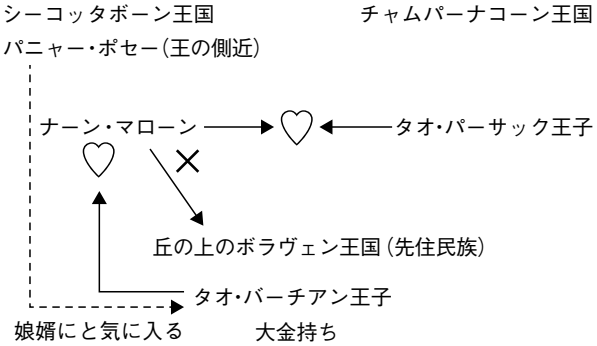


図16 タオ・バーチアンとナーン・マローン物語の登場人物関係図

なって語り継がれていったものと思われる。

しかしながら、不思議なのは、そもそも想い合っていなかった二人が山となり、川を隔てて向かい合っている点である。しかも物語の中では、想い合っていたナーン・マローンとタオ・パーサックはカンボジア国境近くにある滝もしくは川で死んでいる。それにもかかわらず、ナーン・マローンはおそらく親元と想定されているパクセーの地で山となり、どちらかと言えば嫌っていたタオ・バーチアンの山と対で男山女山として語られる。基本的に親孝行が尊ばれ、親不孝は最大の罪と考えられているラオスでは、親を裏切ると死してなお罪深きものとして罰せられ続けるという教訓的意味合いをこの男山と女山は示しているのではないだろうか。「タオ・バーチアンとナーン・マローン」によく似た話がルアンパバーン地域にも伝わっているが、その話である「クン・ルーとナーン・ウア」でも、親の意向を無視して自ら命を絶ったナーン・ウアとその死を嘆き悲しんで同じく死を選んだ恋人のクン・ルーが、死してなおメコン川を挟んで両岸に離れ離れに眠っているとされる。やはりここにも、ラオスにおいての親不孝は決してハッピーエンドにならないという教訓が含まれているように思えるのである。

7. むすびにかえて

物語は複雑な要素がさまざまに絡み合い成立しているものだが、ラオスの物語で興味深いのは、人々の生活に根付いた仏教思想もさることながら、ラオ族と先住民族[2)]との関係性にあるように思う。6で紹介した「タオ・バーチアンとナーン・マローン」や「クン・ルーとナーン・ウア」には、両物語ともに丘の上の王国に住む先住民族が描かれている。物語の展開においては、どちらもラオ族とおぼしき女性に結婚を拒絶され、逃げられる立場に置かれるものの、いずれも金持ちという設定であることは、何かしらラオ族と先住民族の実際の、もしくは歴史的な関係性を暗示しているように思える。一方、本稿の中心となる物語「12人姉妹」には具体的に先住民族として描かれる登場人物はいないものの、自分たちとは異なる地域に住む異質なものとして描かれる女夜叉の存在は、捉えようによってはラオ族にとっての異民族と読み替えることが可能なのかもしれない。12人姉妹で描かれる女夜叉は最終的に退治される存在ではあるが、12人姉妹が森に捨てられた時には、理由はどうあれ彼女たちを助ける存在でもある。そして、その娘は12人姉妹の末娘の息子の妻となり、夫に尽くす存在でもある。ラオ族にとっての異民族は、隣接した土地に住む異質な存在でありつつも、必然的に混じり合い、時に敵対し、時に協力し合う複雑な関係を互いに築いてきたことが物語の中に反映されているように思える。具体的な読み解きにまでは至らなかったが、実際の土地と関係のある物語から歴史的な民族間の関係性を読み解く手掛かりは得られたように思う。

2）現在のラオスには、ラオ族よりも後にラオスの地に移住してきた少数民族もいるが、歴史的にラオスの王室儀礼に登場する少数民族は、多くの場合ラオ族よりも先にラオスの地にいた先住民族であることから、ここでは先住民族とする。

参考文献

Lao Statistics Bureau, Ministry of Planning and Investment. 2015. “Results of Population and Housing Census 2015”.

根岸範子、前田初江 1994『ラオスの民話』黒潮社。

Ouvrard, Hélène. 2016. “Performing Arts in Laos”. Paris: Pha Tad Ke Botanical Garden.

Pavie, Auguste. 1898. “Mission Pavie Indo-chine 1879-1893: Études Diverses 1 Recherches sur La Littérature du Cambodge, du Laos et du Siam”. Paris.

Somsanouk, Mixay. 2004. “Treasures of Lao Literature volume 2”. Vientiane: LJA Publications.

——————. 2013. “Lao Legends”. Bangkok: White Lotus Press.

World Bank. 2009. “Information and Communications for Development 2009: Extending Reach and Increasing Impact”.

ກະຊວງສຶກສາທິການ ສະຖາບັນຄົ້ນຄວ້າ ວິທະຍາສາດການສຶກສາແຫ່ງຊາດ., 1998(2005)., “ແບບຮຽນວັນນະຄະດີ ຊັ້ນມັດທະຍົມປີທີສີ່”. [教育省・国立教育科学研究所編纂., 1998(2005)., 『高校１年生用　文学教科書』].

ສະຖາບັນວິທະຍາສາດສັງຄົມແຫ່ງຊາດ, ສະຖາບັນ 2013. “ຕຳນານ-ພົງສາວະດານ ເມືອງຫຼວງພຣະບາງ”., ວຽງຈັນ. [国立社会科学研究所, 歴史研究所., 2013.,『ルアンパバーンの伝説・年代記』].

ເພັງແສງຄຳ, ບົວໄລ., ສີກຸນນະວົງ, ກັນຫາ., 2010. “ພູທ້າວພູນາງ”., ວຽງຈັນ. [ペンセーンカム, ブアライ編., シークンナヴォン, カンハー絵., 2010.,『プータオ・プーナーン』].

ເພັງແສງຄຳ, ບົວໄລ., ສະຫວັນໄຊ., 2010. “ທ້າວ ເຈັດໄຫ”., ວຽງຈັນ [ペンセーンカム, ブアライ編., サワンサイ絵., 2010.,『タオ・チェッハイ』].

ວິລະຈິດ, ຄຳພັນ., 1996. ‘ນິທານ ທ້າວພຸດທະເສນ ແລະ ນາງກັງຮີ-ນິທານພື້ນເມືອງWວງພະບາງ’., ສະຖາບັນ ຄົ້ນຄວ້າວັດທະນະທຳ;ກະຊວງຖະແຫຼງ ຂ່າວແລະວັດທະນະທຳ., “ວິທະຍາສານ ມໍລະດົກ ລ້ານຊ້າງ ປີທີ1 ສະບັບທີ2 ມີຖຸນາ-ທັນວາ 1996”., ວຽງຈັນ., 90-100. [ウィラチット, カムパン., 1996.,「タオ・プッタセーンとナーン・カンヒーの物語:ルアンパバーン民話」., 情報文化省文化研究所.,『ラーンサーン・ヘリテージ・ジャーナル vol.2 6月−12月 1996年』. pp.90-100.].

ນັກຂຽນເມືອງມໍລະດົກໂລກ., 2014., “ສີສັນ ວັດທະນະທຳຂອງຊາວຫຼວງພະບາງ”., ວຽງຈັນ. [世界遺産都市作家., 2014.,『ルアンパバーンの鮮やかな文化』].

Digital Library of Lao Manuscript http://www.laomanuscripts.net/en/index（2016年8月14日閲覧）。

Pha Tad Ke Botanical Garden https://www.pha-tad-ke.com/（2017年12月9日閲覧）。